

その夫婦は、随分と背えが高い旦那さんと、こまくて柔かい奥さんとの、二人でした。結婚して二年ほど、成人して間もないだろう奥さんは、いわゆる専業主婦というやつでして、小さな手であくせくと働くのです。

夫を立てるよき妻ぞ、とご近所さんは口を揃えて言いますけれど、さあ、本当のところはどうでしょう。夫婦のお隣さんときたら、母子家庭なのに幼い娘をほっぽり出してこれまた若い娘御が遊び回っているのですから、それと比べたらよっぽどねえ、どうせそんな話なのでしょう。

さて、その肝心の「立てられている」らしい旦那のお話ですけれど。背えが高い形なのに、無口、無愛想、無表情。それにとどまらず癩癩もちで、やつても怒つて、やらずとも怒つて、なんてそんなの日常茶飯事。二重規範だとかなんとか、そんな呼び名を奥さん——女が知るのには生まれた時代から元号が一つか二つ飛び越えた頃のことですけれど、そんな二進も三進もいかない御仁とよくまあ、根気よく付き合っているものでした。

旦那——男は商社勤めと言うやつで、朝に出かけて、夜に帰って、というつまらない繰り返しの中に、じりじりと鬱憤を溜め込んでいらしいのです。

けれど、けれど、だからと言って、三十三歳児みたいな振る舞いが許されるはずもないのですけれど。

お出迎えがなければ憤るのに、おかえりなさい、には返事はしない。同僚と飲み明かして深夜まで帰ってこないのに、連絡もよこさない。そうして女が寢床にいれば叩き起こすのに、起きて待っていて早く寝ておけと怒りだして重い毛布を投げつけてくるのです。

それから、作られた一汁三菜の夕食を前に、小さな不出来を見つけてはつつくのが常でした。茶碗が伏せられているとか、箸が忘れられているとかで、「そうか、俺に食わせる飯はないというのか」と静かに詰り、その後二時間ぐらいは「飯がない俺は可哀そうだ」と喚くのだし、「ここにありませんよ」と訴えても、見向きもしないのです。

そんな男が、ぼん、と苛立ちに任せて扉を叩き閉める音は安普請のアパートには響き渡って、ご近所の奥様からの苦情はいつも女が受けていました。可哀そうに、大丈夫、と同情とて寄せてもらいました。同時に「緑の紙は必要かしら」と尋ねる彼女らのその言葉に、女は首を捻るしかありません。それはなに、と幼子のように尋ねることも出来ずいた女に、気を利かせたのだから、嫌がらせなのだから、ご近所回覧にその緑の紙——離婚届が挟まっているのを見たときには、がつんと頭を殴られたような心地を覚えたのです。

男は、直に接しないご近所方にさえ、大分嫌われているようでした。それでもなければ、わざわざそんなもの用意する

ことはないでしょう。けれどもやはり、ご近所付き合いは避けては通れないものでした。「騒音で迷惑をかける」とそればかりで追い出されては堪らないから、と女は町内会の寄り合いやらごみ捨ての手伝いやら、そういうご近所付き合いには人一倍精を出さねばなりません。そうというのに、ご近所に挨拶一つしていない男ときたら、無駄な付き合いだと言って、寄り合いのせいで一品減った夕食を前に、女の頬を言葉で叩くのです。

「——すみません」

「すみません、だけか！ 次はしないと云えないのか！」

「ええ、次は、いたしません」

「誰がおうむ返しをしろと言ったか！ それは俺が言った言葉だろう！」

「……すみません。寄り合いの日にも、きちんと変わらないお夕食を作りますから……」

どうにも質の悪いことに、男は、決して手を上げはしないのです。それがお育ちのせいなのか、それとも単に意気地なしなのかは知らないのですが、言葉で殴って、物を床に叩きつけて、襖を蹴りつけて、それで終いにしてしまうのです。いいことか、悪いことかは、女にはもう分かりやしません。

「なあ、ただいまあ、帰ったぞ」

「……ええ、お帰りなさい」

「ああ、いい匂いだ、俺の好物の匂いだなあ」

さて、そんな、男でしたが。日頃の自分の行いも忘れてしまったかのように、機嫌のいい日も幾らかありました。別段、酔っているわけではないのです。気が向いたのか、何かいいことでもあったのか。にこにこ妻に話しかけて、話し返されてご機嫌になって、共に風呂に入って、美味しい美味しいと夕食を食べて。それから耳掃除までしてもらって、揃いの指輪をした手を繋いで、共に寝所で横になるのです。

ああ、今日にはこやかですなあ、と女がほっと胸を撫で下ろしたのも束の間、次の朝になって、男の着替えの靴下の左右が逆になっていたとか、そういう女のうっかりでまた痛癢はぶり返されるのでした。朝っぱらからどたんばたんと床を踏み鳴らしては、朝食は無かったものにして目もくれず、「ああ昼まで腹を鳴らして過ごさねばいけないのか」と喉から不機嫌声を捻りだしては鞆を振り回すようにして担ぎ、玄関まで見送りに出ようとする女を待たずして「出来の悪い女め」と捨て台詞のように、どたんばん、と扉を閉めて出勤していくのです。もう、ここまでされてしまったのは、あらまあ、と小首を傾げるほかに、女に出来ることつたらないのでした。

こんなことばかりですから、女は、男の突拍子の無い気ま

ぐれにも幾分慣れ切っているつもりでいました。けれども、とある土曜の昼食時。食べはしないと知っている男の昼食を作っておいて、それを横目に外に蕎麦でも啜りに行くのを待っていた時のことです。鶏肉の甘辛炒めを作ったフライパンを流し台において、仕上げの刻み海苔を振りかけながら、鼻歌を一つ。と、女のそんな一瞬のような隙について、ざあ、ざあ、と旦那がそのフライパンを洗っているものですから、女は、はた、と手を止めました。

悪い夢でも見ているかのような心地に、けれども、激しい流水のせいで飛び散る飛沫の冷たさに、それが夢でないのが知れました。出し過ぎた洗剤が泡だらけになっていて、ざりざりと表面を削るような強い力で油と甘辛のたれをすすぎ落していく、ざあ、ざあ、と流れっぱなしの水の音。その手元は、どうにか見ることが出来ましたが、女には男の顔を見上げることが出来ませんでした。

「どうしたん、です」

返事は、ありませんが。

「ごめんなさい、邪魔でした?」

その言葉を聞いた途端、男は、びたりと止まりました。けれども再び動き出した手は、そのままざあざあと泡をすすいだフライパンを、ぶん、と片手で振り上げて下ろし、水気を

切ったそれを、静かに、殊更丁寧に、調理台の上に置きました。

つい、と剣呑な視線が女の方へと向きます。なんで、どうして、不思議なこと、と思考が止まっている女の口からは、

「あらあ、ありがとうございます……」

と、戸惑い混じりの感謝が漏れました。

それに返事をするでもなく、会釈で返すでもなく、ふ、とまた視線は逸れました。大きな背中が、女が最初に思っていた通り、用意した昼食になんて目もくれず、財布片手に玄関へと向かうのです。

「——あら、あら、まあ、まあ……」

どたばん、と扉が閉まる音を聞いてから、女は、笑い飛ばそうとして、出来ずに、取り繕うように呟きました。

良心だなんてそんなもの、女は信じていませんでした。気遣いという心があるとも、知りませんでした。お得意の気まぐれにしたって、そんなもの、今更阿呆の様ではないかと思うのに、ねえ、一体、何がしたかったのでしょうか。そんな行い一回ぼつちで、何が変わるって言うのでしょうか。

ぐるり、ぐるりと思考を回して、女は顔を覆うのですけれど、答えが出るはずありません。倍量作ったのだから、明日も食べようと思っていた昼食は、気付けば女の腹の中に居

ました。これっぽっちも味なんて、覚えていやしいのですけれど。

今日は、ただいま、とは聞こえませんでした。帰宅した男は、かさり、ぼりり、と音を立てて包装紙をちぎりながら、女のいる居間へと歩いてきます。床に落ちたその掃除は、当たり前のように女の仕事なのでしょう。おかえりなさい、という女の声は、誰にも拾ってもらえずに、木造の壁やら天井に吸い込まれていきました。

小さな、男の手のひらに埋もれそうな箱が床に落ちて、取り出されたのは口紅でした。つや消しの黒色をした小さな筒、その蓋がきゅぼりと外されて、また、床に落ちます。現れた金の筒の内から、くるりと回って顔を出したのは、血のように真っ赤な紅でした。

化粧つけなどどつくに奪われた肌を、男の武骨な指が掴んで、顎の下を掬います。無理くりを上を向かされた女の唇の先に、そうつと紅が触れました。新品だからか艶々とした表面のまま固められたそれが、ぐに、と唇の熱で溶けだしました。ひどい身長差を補うためにか、男の大きな背中ではまあるく曲げられていて、ああ、きつと、肩が凝りますでしように、と女は見当違いに思っていました。

つと、きゅう、と紅が唇の上を這っていくく、擦ったさに、女は身を振るまいと手のひらに爪を食い込ませています。男は、

どれだけ塗ったくればいいのかもきつと知らないのでしょうか。二度、三度、四度、と往復していく口紅の動きに、知らず、女の肩が震えました。逆光で男の顔が見えなくて、どんなに良かったことでしょうか。

長い長い一分三十秒が過ぎ去って、ふう、と男が息をつきました。それから、じい、と女を見つめてくるのです。

「……どうしたん、です？」

ああ、口を開かなければよかった、と思ったのは言葉が出切ってしまった後でした。女の思考はあちらこちらにとっ散らかっていて、ろくに働いていないのです。なんで、どうして、不思議なこと、化粧をする金も時間も無駄だと言ったのが、一体誰と思っているのでしょうか。

「ごめんなさい」

いつだかと同じ言葉の流れになったのは、不可抗力と申しましょうか、それとも、謝罪の後にしか自分の考えなど紡げなくされたせいだったでしょうか。

「見苦し——」

かったでしようか、と続くはずだった言葉は、きゅむ、と押し付けられた唇の向こうに消えていきました。

「……、……」

うん、と頷いてひとり満足したらしい男は、ぼい、と口紅

を机の上に放り出し、寝室へと足を向けます。いつも通りの、無口無愛想無表情の、その男の唇に、間抜けにべったりとついた紅の色に、女の視線は縫い留められていました。それから、ゆっくりと唇に当てた指先に、ほんのりと移った色を見て、は、と息が漏れるのです。

当時の流行はといえば「キッスしても落ちない口紅」の再興のようなリップだったのですけれど、男が買って来たそれは、そんなものとは似ても似つかないものでした。どこで買ったのか、知る術も思い当たりません。

さて、男は、きつと食後の昼寝でもするのでしよう。掃除機をかけると怒ってしまうでしょうから、それは明日にするしかありません。ああ、それと、きつと寝具に紅を移してしまっただろうから、夕方の内に変えておかねば、とそんな思考は回り出すのですけれど。ええ、ええ、と女の口からは、意味をなさない言葉しか、吐き出されませんでした。

ばた、と静かに扉が閉じられると同時に、静寂が部屋に落ちて、

「……ふ、あは」

そうして、女の無邪気な笑い声が、嫌に湿った息とともに零れ落ちました。

笑う以外にどうすればいいのか、誰も教えてはくれません

でした。

さて、その夫婦は、随分と背えが高い旦那さんと、こまかくて柔らかい奥さんとの、二人でした。結婚して三年ほど、成人してそう間もないだろう奥さんは、いつもその顔立ちにはさっぱり似合わない口紅を、他はすっぴんの唇にのせて、たおやかに微笑んでおりました。

夫を立てるよき妻ぞ、とご近所さんは口を揃えて言いますけれど、さあ、本当のところはどうでしょう。

女は、今日も緑の紙に万年筆を走らせて。

愛しい、愛しい、愛しい旦那様の名が来るべきところには、

ちう、と口紅の跡がべたりとつくよう口づけて。

それから、あは、と泣いたように笑いながら。

びりびりに破って、男は覗き込みもしない、生ごみの肥溜めへと今日も投げ込むのです。

何がしたくてするのでしょう、って、これでいったい何が変わるでしょう、って、そんなこと。

ええ、きつと、女とて知らないのですけれど。

女とて、ちつとも分かつちやいないのですけれど。

どうせ、どうせ、意味なんて無いのですけれど。

半年か、一年もしない内に、口紅が無くなってしまうまで。

それでも女は、それをやめることはないでしょう。

かつて愛したあの男が、また買い与えてくれると言うならば、どうせまた逃げられないのですけれど。